Quelqu’un n’est pas venu. 型否定文

藤田　康子

０．はじめに

Larrivée (2005) は quelqu’un が Quelqu’un n’est pas venu. 型否定文の主語位置では容認されにくいが，何らかの反論をするための対比的な文脈があれば用いることができ，全称否定解釈されることを主張する論文である。この主張は妥当であると思われる点もあるが，quelqu’un の指示機能という観点から考察すると，修正すべき点も含まれている。本稿では，Larrivée の主張の問題点を指摘し，改めて quelqu’un の指示機能について検討したい。

１．全称否定解釈の quelqu’un

1.1. Larrivée (2005) の仮説

まず，Larrivée (2005) の論旨を見よう。Larrivée によると，文脈を欠き，特別なアクセントやイントネーションもないとき，quelqu’un は否定文で用いにくい。

(1)　?* Il n’est pas venu *quelqu’un*.

(2)　?* *Quelqu’un* n’est pas venu.

しかし，談話の中では用いられることがあり，従来の研究(1)では，une certaine personne, une et une seule personne で置き換えたり, il y a を用いて言い換えたりすることができるので，専ら存在解釈を受けるとされてきた。

(3)　a.　*Une et une seule personne* n’est pas venue.

b. Il y a *quelqu'un* qui n'est pas venu.

ところが，次のような発話例がある。

(4) comment peux-tu savoir si elle ne le désire pas maintenant, ce qu'elle dirait si elle pouvait parler, jamais encore dans cette maison *quelqu'un* n'est mort de cette façon, ... (C. Simon)

(5) Quand un clan mafieux est démantelé, tous ceux qui en font partie sont ipso facto coupables, bien sûr à des degrés différents. Mais il reste qu'ils sont coupables. *Quelqu'un* ne peut pas dire : 'non, je me suis gardé propre'. (http://www.congonline.com/Forum/Ilunga19.htm)

このような発話では quelqu'un は personne と近似する意味を表し，全称否定解釈を受けるというのが Larrivée の主張の趣旨である。

1.2. il y a による言い換え

Larrivée は quelqu'un には存在解釈と全称否定解釈とがあると考えている。先に見たように，*Quelqu'un* n'est pas venu. が存在解釈されるときは，il y a を用いて言い換えることができる。

(3) b. Il y a *quelqu'un* qui n'est pas venu.

では，全称否定解釈される (4)，(5) のような発話を il y a を用いて言い換えることはできないのだろうか。

(4)′ *Dans cette maison il y a *quelqu'un* qui n'est encore jamais mort de cette façon.

(5)′ *Il y a *quelqu'un* qui ne peut pas dire : 'non, je me suis gardé propre'.

このような言い換えでは，quelqu'un の指示対象に特定の個体の存在を認めることになり，(4)，(5) の意味とは全く異なる発話になってしまう。

一方，quelqu'un を personne に置き換えても，ほぼ同じ意味になる。

(4)″ Dans cette maison *personne* n'est encore jamais mort de cette façon.

(5)″ *Personne* ne peut dire : 'non, je me suis gardé propre'.

述語を満たす主語位置の項が空集合であり，personne は全称否定解釈される。

これらの言い換え・置き換えは，(4)，(5) のような発話が存在解釈されるのではなく，全称否定解釈されるとする Larrivée の主張に合致する。

2．否定の種類と対象

2.1. 論争否定による命題否定

1.2. で 全称否定解釈される *Quelqu'un* ne peut pas dire. は Il y a *quelqu'un* qui ne peut pas dire. で言い換えられないことを見た。このことは *Quelqu'un* ne peut pas dire. の否定が述語を対象としていないことを示している。では，否定は何を対象としているのだろうか。

Larrivée は，全称否定解釈を受ける Quelqu'un n'est pas venu. 型否定文は命題全体が否定されるのであり，メタ言語用法や否定疑問のように命題の一部が否定されるのではないと述べている (p.290)。その論旨は次のようなものである。

Larrivée によると，Quelqu'un n'est pas venu. 型否定文が全称否定解釈されるには「論争否定」の文脈が必要であるという。論争否定とは Ducrot (1973) が提案する概念である。否定には「論争否定」と「叙述否定」がある。叙述否定の発話 Pierre ne doit pas fumer. では，否定的内容「ピエールは煙草を吸ってはならない」が肯定される。一方, « Est-ce que je dois revenir ? – Non, tu ne le dois pas, mais ce serait gentil. » の否定「戻ってこなくてよい」は論争否定であり，tu ne le dois pas は je dois revenir という仮定に対立し, この肯定的内容を却下する否定行為が行われる。このように，論争否定では対立する肯定発話への反論が行われ，叙述否定では対立する肯定発話がなく，否定的内容が肯定される。前者では否定の対象が文であるのに対し，後者では否定の対象は文であることも述語であることもある。

Larrivée は，全称否定解釈される quelqu'un を主語とする否定文は論争否定であると指摘している。Larrivée が挙げている例を見よう。

(6) – Quelqu'un est-il venu ?
– Non, *quelqu'un* n'est pas venu.

(7) C'est-à-dire que, sur le plan du principe, il doit y avoir un refus d'obéissance dès lors qu'on nous demande quelque chose d'immoral. *Quelqu'un* ne peut pas dire 'j'ai reçu des ordres' quand il s'agit de condamner des gens et de faire ce qui s'est fait à cette période.(http://www.humaniste.presse.fr/journal/1998/1998-04/1998-04-03/1998-04-03-028.html)

(8) – Et *quelqu'un* n'a pas tapé le scandale ? (entendu, 2003)

(9) Tous ceux qui étaient inscrits au fichier ont été invités à soumissionner. (...) Est-ce qu'on doit se limiter au fichier ? Je veux dire, l'objectif, c'est d'aller beaucoup plus largement, de faire un appel d'offres public, le plus possible. Ça, je pense que là j'en suis beaucoup plus. Plutôt que d'essayer d'exercer un suivi pour savoir pourquoi *quelqu'un* n'a pas soumissionné. (http://www.assnat.qc.ca/archives-35leg2se/fra/Publi-cations/ débats /journal/cba/ 960917.htm)

(6) は肯定の事態が先行文脈で明示されている。(7) は pouvoir が使われているため，禁じられていることと許されていることの対立がある。(8) はある組織での不正行為に言及した後に続く発話であるが，スキャンダルが巻き起こって当然だという期待が言外にある。(9) は誰かが入札に応じるという肯定の事態が期待されていた文脈である。どの例でも肯定の事態が背景にあり，これが論争否定によって否定されている。この他，Larrivée が引用している全称否定解釈の quelqu'un はいずれも対立する肯定命題への反論の文脈で用いられている。全称否定解釈を受ける quelqu'un を主語とする否定文は命題全体が否定されるという Larrivée の主張は当を得ていると思われる。

2.2. quelqu'un と否定

全称否定解釈される Quelqu'un n'est pas venu. 型否定文の否定が命題全体を対象としているということは，quelqu'un が否定の直接的な対象になっていないということである。Larrivée は quelqu'un が否定の直接的な対象になりにくい理由を次のように説明している (p.290 - 292)。彼の論旨を補いながら見てい

こう。

まず，理由のひとつに quelqu'un がスカラー値を表さないことがある[2]。スカラー値を表す語句はスカラー値が否定の対象になる。une seule personne はスカラー値を表すので，否定されると否定極性語として機能する。(10) は「ただの一人も来なかった」と解釈される。

(10) Il n'est pas venu *une seule personne*.

一方，スカラー値を持たない quelqu'un は seulement で修飾すると不自然な文になる。

(11) * Il n'est pas venu *seulement quelqu'un*.

また beaucoup もスカラー値を表すので，Il n'est pas venu beaucoup de monde. は pas が 直接 beaucoup を否定する pas beaucoup を意味すると解釈できる。pas quelqu'un は，pas quelqu'un mais quelque chose のようなメタ言語用法以外では一般に容認できない。

quelqu'un には反意語性がないことも直接 quelqu'un を否定できない理由のひとつであると言う。Tous n'ont pu lui en parler. は否定が直接 tous にかかり，pas tous「全員ではない」という反意語の解釈ができる。このとき，全体集合 tous は分割され，pas tous, すなわち seulement certains という部分集合ができる。quelqu'un は pas quelqu'un によって quelqu'un の指示対象の集合を分割し，部分集合を全体集合の反意語とすることができない。

このように Larrivée は une seule personne，tous など不定名詞句にかかる否定の多くはスカラー値を対象にしたり，反意語解釈を導いたりすると考え，この操作が quelqu'un ではできないことが quelqu'un が否定の直接の対象になりにくい理由であると考えている。

quelqu'un には数を表すマーカーがない[3] のでスカラー値を表さないし，反意語性が欠落しているのも事実である。しかし，これらの性質は quelqu'un にもともと備わっていないのだから，それについて否定が行われないのは自明のことである。これらの性質の欠落をもって quelqu'un に否定が直接かからない根拠とすることはできない。論証すべきなのは quelqu'un に備わっているどの

ような意味特性が原因で否定が直接及ばないかである。

2.3. personne との違い

Larrivée は全称否定解釈される quelqu'un が personne と近似する意味を持つと述べている。personne と quelqu'un の意味特性に違いはないのだろうか。

全称否定命題は「すべての A は B でない」ことを表す。このとき述語「B でない」を満たす主語はある集合の全要素であり，述語「B である」を満たす主語は空集合である。personne n'est venu は，述語 est venu を満たす主語が空集合であることを表す。personne はそれ自体が自らの集合に要素が存在することを否定する否定の要素であり，単独でも空集合を表すことができるが (12)，あたかも personne が構成する集合が要素をもち，その存在を否定するかのような文は非文になる (13)。

(12) Personne n'est venu ? – Non, *personne* .

(13) *Il n'y a pas *personne*.

personne n'est venu が全称否定解釈されるのは，personne が空集合を表すためである。

Quelqu'un n'est pas venu. の quelqu'un が否定の直接的な対象となって全称否定解釈されるのであれば，「述語 est venu を満たす主語が空集合である」ことを表さなければならない。すなわち，否定された quelqu'un が空集合を構成しなければならない。ところが quelqu'un は人間というクラスに属す任意の要素からなる集合を構成する。quelqu'un を否定しても，人間というクラスに属す誰かではないことを表すが，空集合を表さないので，全称否定解釈の文脈であっても単独で用いることはできない。

(14) Quelqu'un n'est pas venu ? – *Non, *pas quelqu'un*.

quelqu'un が否定の直接的な対象にならない理由は，quelqu'un が直接否定されても空集合であることを表せないからである。Quelqu'un n'est pas venu. 型否定文は文全体が全称否定解釈されるのであって，quelqu'un が全称否定解釈されるわけではない。

３．quelqu'un の指示対象

3.1. Larrivée の仮説の矛盾点

Larrivée が主張するように，Quelqu'un n'est pas venu. 型否定文の否定は quelqu'un ではなく，命題全体を対象としている。ということは，肯定命題の quelqu'un の指示対象が否定命題でも引き継がれているはずである。ところが Larrivée は Quelqu'un n'est pas venu. 型否定文の quelqu'un は全称否定解釈を受け，他の用法とは異なる固有の用法であると考えているので，対立関係にある肯定命題の quelqu'un とは異なる指示対象を持つということになる。Larrivée の仮説はこの点で矛盾する。

Larrivée は全称否定解釈を受ける quelqu'un は，存在解釈のようにある一個人 (un particulier) を指示対象としているのではなく，「人間というクラスの一員という概念を導入する」(291)，Quelqu'un n'est pas venu. 型否定文は「個体 (un individu) を基にした対比を含意する」(293) と述べるに止まり，指示対象について詳しい考察をしていない。また，対立関係にある肯定命題の quelqu'un についても何ら分析をしていない。否定命題と肯定命題において quelqu'un はどのような指示対象を持つのだろうか。

3.2. 指示対象とスペース

quelqu'un がどのような指示対象を持つかは，Quelqu'un n'est pas venu. 型否定文で肯定命題が否定されるという構造が談話世界のスペースの構造にそのまま反映すると考えることにより，説明することができる。肯定命題と否定命題の内容は談話世界においてどのようなスペースに構築されるのだろうか。

論争否定は肯定命題を否定する。このとき，論争否定が行われる談話世界に肯定スペースが開かれ，肯定命題の内容が入力されるとともに，quelqu'un の指示対象もこの肯定スペースに登録される。肯定スペースを内蔵する談話世界では肯定命題全体が否定される。quelqu'un の指示対象は肯定スペースの中に

登録されるのであって，肯定スペースと並行的に否定スペースが設けられ，肯定スペースの quelqu'un に対応する quelqu'un が否定スペースにも登録されるのではない。論争否定が行われる談話世界に肯定スペースの指示対象とは別に指示対象があるのではない。

では，肯定スペースに設定される quelqu'un の指示対象はどのような指示特性を備えているのだろうか。

(4) (...) jamais encore dans cette maison *quelqu'un* n'est mort de cette façon, ...

肯定スペースは仮定的に設定されるスペースであり，談話世界の空間・時間とは直接的な関係をもたない。(4) に対応する肯定命題 *quelqu'un* est mort de cette façon の内容は談話世界において現実に起こったことではない。動詞が直説法複合過去形であっても，quelqu'un が談話世界の時空に定位されることはなく，quelqu'un はある特定の人物を指示しない。指示対象は人間というクラスに属す要素であるが，どの要素であってもよく，肯定スペースにおいて「変項」として存在する。肯定スペースを内蔵する談話世界においても変項として存在することに変わりはない。

3.3. 指示対象の定位

これまでの考察から，quelqu'un には少なくともある特定の個体を指示対象とする存在用法と人間というクラスに属す任意の要素を指示対象とする非特定用法があることがわかる。述語はこうした用法を決定する要因のひとつであると考えられる。Kleiber (2001) によると，述語には「特定化述語」と「非特定化述語」がある。特定化述語は主に出来事を表し，述語の項を「談話モデル」の時空に定位させ，特定の個体を指示させる機能をもつ。非特定化述語は持続的・一時的・エピソード的性質を表し，述語の項を談話モデルの時空に定位させない。(15), (16) は特定化述語，(17), (18) は非特定化述語の例である。un, des, du, beaucoup de など「弱い限定詞」のついた不定名詞句が非特定化述語をとると，存在解釈が成立しない。

(15) Des inconnus ont cambriolé la maison de Léa.

(16) Beaucoup de neige est tombée sur les Vosges ce week-end.

(17) ? Des inconnus sont étonnés.

(18) ? Beaucoup de neige est molle.

quelqu'un も存在用法では指示対象が談話世界の時空に定位される。(19) は *TLF*, (20) は *Frantext* で収集した例である。

(19) ... *quelqu'un* gratta, timidement d'abord, puis avec bruit, contre la porte de la loge. Et quand M. Smithson l'eut ouverte, un capitaine effaré se montra. (Bourges, *Crépusc. dieux*)

(20) *Quelqu'un* m'a demandé hier si j'allais bientôt me marier et j'ai répondu : « j'aime trop de garçons pour n'en épouser qu'un » à quoi la dite personne a rétorqué : « Alors c'est que vous n'en aimez point d'amour ».
(D. Domenach-Lallich, *Demain il fera beau : journal d'une adolescente*)

これらの発話では特定化述語が使われている。指示対象は誰であるかはわからないが，ある特定の個体である。

一方，3.2. で見たように，Quelqu'un n'est pas venu. 型否定文の quelqu'un の指示対象は肯定スペースにおいて変項として存在し，談話世界の時空に定位されない。その理由は quelqu'un は肯定スペースに設定されるが，肯定スペースは談話世界の中に仮定的に開かれるスペースであり，母体スペースである談話世界の時空の軸とは直接的な関係を持たないためである(4)。

(21) (...) c'est à ne pas croire... jamais *quelqu'un* n'a senti, comme vous sentez... vous avez donc un cancer dans le nez ... dans l'estomac, peut-être ? (O. Mirbeau)

jamais *quelqu'un* n'a senti は「誰であるかは明らかではないが，ある特定の誰かが感じた」という意味ではない。特定化述語 a senti が用いられていても，quelqu'un の指示対象は人間というクラスに属す要素であればどの要素でもよく，ある特定の個体ではない。

このように，存在用法では指示対象はある特定の個体であり，唯一性が認められるが，全称否定文では指示対象は人間というクラスのどの要素であっても

よく，交換可能である。唯一性は認められない。

3.4. 非特定用法

3.2. で見たような変項として存在する指示対象は全称否定解釈される発話以外にも見られる。

(22) Ainsi, il semble difficile d'annoncer à *quelqu'un* "Pierre n'est pas le cousin de Marie", si personne n'a auparavant prétendu qu'il l'était. (Ducrot, 119)

この quelqu'un も誰であってもよい誰かである。人間というクラスに属す要素であれば，どの要素とも交換可能である。また，何人であってもよく，数も定まらない。唯一性は認められない。

(23) Cependant, ... il est plus aisé de blâmer *quelqu'un* que de collaborer pour trouver une issue à un problème. (cité dans Schnedecker 2002)

(24) Il n'y a aucun critère qui puisse être sérieusement invoqué pour décider que *quelqu'un* est, ou n'est pas, poète. (J. Roubaud, *Poésie*)

発話の内容は一般論である。(23) は (22) 同様，quelqu'un を項とする述語は不定詞である[(5)]。(24) は quelqu'un が不定詞の目的語節内にある。いずれも quelqu'un の指示対象は，述語によって談話世界の発話の現在を基準点とする時空に直接定位されない。

このように，quelqu'un が変項として機能する非特定用法は，全称否定解釈を受ける発話に限らない。Larrivée は Quelqu'un n'est pas venu. 型否定文の quelqu'un が全称否定解釈を受ける独自の用法であると考えているが，quelqu'un の指示対象という観点から見ると，全称否定解釈を受ける発話に固有の性質が見られるわけではない。

3.5. quelqu'un の指示機能

3.3. と 3.4. の考察から，quelqu'un がある特定の個体を指示する存在用法は，述語に起因するのであって，quelqu'un 自体に備わっている指示機能に由来するものではないことがわかる。こうした外的要因が付加されないときは，

quelqu'un の指示対象は集合内のどの要素とも交換可能な変項として存在する。このような quelqu'un の指示機能について，次の仮説を立てよう。

【quelqu'un の指示機能】

１）quelqu'un はデフォルトでは人間というクラスの任意の要素を指示する。要素は交換可能であり，変項として談話世界に存在する。指示対象に唯一性は認められない。

２）quelqu'un が特定化述語の項であり，指示対象が談話世界の時空に定位されるという条件が付加されると，quelqu'un はある特定の個体を指示する。指示対象には唯一性が認められる。ただし，quelqu'un が特定化述語の項であっても指示対象が談話世界の時空に定位されないときは，quelqu'un の指示機能は１）に準じる。

3.6. Muller (1991, 2002)

Muller (2002) は不定名詞句を含む単文 Un homme est entré. は意味的に Il y a un homme qui est entré. と等価であり，二つの述定を含むと考えている。一つは il y a であり, 不定名詞句を項とし, 新しい談話対象として発話文脈に導入する。もう一つは事行を表し，不定名詞句によって導入される談話対象に属性を付与する (60-69)。

不定名詞句が il y a による述定の対象であるという Muller の考え方は, 不定名詞句が表す談話対象が談話世界に存在することを意味する。この点では上述の仮説と一致する。しかし, Muller は quelqu'un の発話例の分析をしておらず, 指示対象の特性についても述べていない。存在用法，非特定用法などの用法についても考察しておらず，それぞれの用法において，quelqu'un の指示対象がどのような特性を持つかも考察していない。Quelqu'un n'est pas venu. 型否定文も取り上げていない。

また Muller (1991) は Je ne crois pas qu'il ait parlé à *quelqu'un*. の quelqu'un は否定の間接的な支配下にあり，qui que ce soit を意味すると述べている (103-104)。qui que ce soit は否定文脈で用いられ，否定極性を表すので，こ

の quelqu'un は否定文脈特有の用法であるということになる。しかし，信じようと信じまいと，発話者が信・不信の判定を下す内容は同じであり，quelqu'un の指示対象も同じはずである。quelqu'un の指示対象は，談話世界に仮定的に設定された「信念の内容スペース」に存在すると考えられる。それは誰であってもよい誰かであり，変項である。発話は「誰であるかは特定できないが，ある特定の誰かに話したとは思わない」という意味ではない。談話世界では，「信念の内容スペース」に構築された事態 il ait parlé à *quelqu'un* を信じないという否定的内容が肯定される。この quelqu'un には仮説１）の指示機能が働いていると考えることができる。

４．おわりに

Quelqu'un n'est pas venu. 型否定文の quelqu'un の用法はこのタイプの否定文に特有のものではない。quelqu'un が本来備えている指示機能が発揮されているに過ぎない。このことは，論争否定が行われる談話世界に肯定スペースが設定され，否定はこの肯定スペース内の事態全体を対象にすると考えることで説明できる。Quelqu'un の指示対象は人間というクラスの任意の要素であり，肯定スペースに変項として存在する。全称否定解釈されるのは文全体であり，quelqu'un ではない。このような指示機能は，Quelqu'un n'est pas venu. 型否定文だけではなく，指示対象が談話世界の時空に定位されない肯定文にも見られる。どちらも「非特定用法」であると考えられる。quelqu'un が特定できないある特定の要素を指示対象とする「存在用法」は，指示対象が談話世界に定位されるという外的要因によって初めて可能になる。指示対象が談話世界に定位されるかどうかを決定する要因には，特定化述語であるか非特定化述語であるかという述語の性質の他に，スペースの設定のされ方がある。

注

1. Larrivée は Muller (1991, 2002)，Corblin, F. et Tovena, L. (1999) “On the multiple

expression of negation in Romance", Y. D'Hulst, J. Rooryck et J. Schroten (dir.) *Romance languages and linguistic theory*, 88-95 を挙げている。

2. スカラー値とは大きさのみによって定まる数量のことである。
3. quelqu'un には un が含まれているが，この un は quelqu'un の指示対象の数を表さない。
4. quelqu'un の指示対象は肯定スペースにおいても定位されない。肯定スペースは肯定命題の内容のみを収納する局所的なスペースであり，肯定命題の内容以外の情報がない。肯定命題の表す事態を定位するための時空の指標はない。
5. Schnedecker は非特定用法では quelqu'un を項とする述語が不定詞であることが多いと述べている (p.389)。

参考文献

Corblin, F. (1997), "Les indéfinis：variables et quantificateurs", *Langue française* 116, 8-32.

Ducrot, O. (1973), *La preuve et le dire*.

Heldner, C. (1992), "Sur la quantification négative", *Langue française* 94, 80-92.

Kleiber, G. (2001), "Indéfinis : lecture existentielle et lecture partitive", G. Kleiber et al. (eds) *Typologie des groupes nominaux,* Presses universitaires de Rennes, 47-97.

Larrivée, P. (2005), "Quelqu'un n'est pas venu", *French Language Studies* 15, 279-296.

Muller, C. (1991), *La négation en français : syntaxe, sémantique et éléments de comparaison avec les autres langues romanes,* Droz.

Muller, C. (2002), *Les bases de la syntaxe : syntaxe contrastive français – langues voisines*, Presses universitaires de Bordeaux.

Muller, C. (2008), "Valeurs communes et valeurs particulières des forme QU- en français", *Langue française* 158, 13-28.

Schnedecker, C. (2002) , "*Quelqu'un* : la bonne à tout faire des pronoms dits indéfinis ? ", *Verbum* 24, 375-398.

（文学部非常勤講師）